

東京都立小岩高等学校 令和4年度 学校経営報告

1 今年度の取り組みと自己評価

(1) 学校経営の成果と課題

- ① 生徒が「小岩高校に来て良かった」と体感できる教育場面の工夫をさせた。
- ② 「小岩高校に来て良かった」という体感から、自己肯定感に繋げるようにした。また、小岩高校の一員として自覚、よりよく生きることを考える「小岩プライド」を育てる教育を展開した。
- ③ 安心・安全で生徒の居場所のある学校づくりを推進した。
- ④ 「30歳の時になりたい自分」を考えさせることをキャリア教育の柱とした。キャリア・パスポートを活用させながら、「各教科」「人間と社会」「総合的な探究の時間」「ホームルーム活動」「特別活動」等での調べ学習や自問自答等を記録させることを定着させる取り組みが必要である。
- ⑤ 「各教科」「部活動」「特別活動」の場面において、7つのグラデュエーション・ポリシー（自ら学ぶ力、課題解決能力、コミュニケーション能力、基礎体力、自律する力、協働する力、行動する力）について、適切に指導した。揺るがぬ力を基盤に未来社会に輝く生徒の育成を継続する。

(2) 組織体制の成果と課題

- ① 企画調整会議を中心としたPDCAサイクルの構築を意識した分掌運営の継続をした。各分掌主任によるC（前年度の反省の確認）→A（課題改善策の検討）→P（改善策の立案）→D（記録を残す実践）のPDCAサイクルを意識した分掌運営はまだ不十分である。
- ② 服務事故ゼロを目指した。年度当初、強化月間（2回）のみならず、様々な規模・方法で、研修を行った。教職員相互の意識を高め、声かけなど注意喚起を常時行う点検体制を整備・強化を継続したい。
- ③ 「体育健康教育推進校」「Sport-Science Promotion Club」、英語教育推進校の学校の特色を生かし、文武両道を更に推進した。一層の質の向上を図っていきたい。
- ④ 経営企画室の経営参画の推進を目指したが、人的欠員状況が発生し、経営企画室を教員が支援をすることが課題となった。
- ⑤ 「学校における働き方改革推進プラン」に基づき、教職員のライフ・ワーク・バランスを推進した。引き続き、勤務時間外労働の減少の取組を継続する。

(3) 学習指導の成果と課題

- ① 「授業の最後にできてほしい具体の姿」＝「評価の観点」となることを視覚的に示すように共通理解を図った。授業での確実な実践ができるようにすることが課題である。
- ② 授業において、自らメモを取ることを推奨するなど「生徒主体の学び」と「深い学び」を引き出す授業実践をして、生徒の頭の中が働いている状態を作り、自分の考えを言ったり、書いたりさせるようにした。これを継続、発展させる。
- ③ 「前時の復習テスト」「小テスト」「繰り返し学習場面の設定」「反復学習プリント」等の基礎的、基本的な学習の定着を促す指導を実践した。生徒に確かな学力を身に付けさせたい。
- ④ デジタル技術を活用して、生徒に興味・関心をもたせ、自ら調べたり、仮説を立てたり、試行錯誤をさせる場面を作った。教員のデジタル技術の差があり、校内研修を充実させる。

- ⑤ 授業の最後に5分以上の時間を確保して、授業のゴールを確認する問題演習や授業でわかったことを自分の言葉でまとめさせる指導した。まだ、授業時間内でそれを実践できない場面もあるので、確実にまとめの時間を確実に取れる授業計画を再考させる。
- ⑥ 「授業でできなかったこと」や「生徒自らの課題」について、自宅学習での3回復習を推奨した。まだ、実践できている生徒が少ないので、継続指導で確かな学力を身に付けさせた。
- ⑦ 長期休業日における講習・補習等の実践は計画的・組織的な実践が課題である。生徒に身に付けさせたい力を明確させて、学年、教科、進路指導部で検討させる。
- ⑧ 放課後の講習・補習の実施と宿題の提出、自習室の開放を推進し、学習習慣を高め、自学自習を支援した。これをしっかり実践する生徒を増やすことが課題である。
- ⑨ 主体的・対話的で深い学びを実現するために、思考力・判断力・表現力の育成を重視した授業改善を積極的に行った。年に2回以上授業観察の後に管理職による授業改善シートを活用した授業改善の振り返りを実施した。授業改善の効果があるので、継続する。
- ⑩ 読書を奨励し、生徒の知的好奇心を高め、教養の涵養、読解力の向上の取組を継続する。
- ⑪ 習熟度別授業や少人数授業を通じて、個に応じた学習指導の徹底を図り、学習の質を向上させた。学習に向かう力に差が出てきているので、これを向上させる取り組みが課題である。
- ⑫ ICT機器や一人1台端末、オンライン授業の実施等のデジタル技術の活用により、生徒主体の学びと深い学びを引き出し、生徒の確かな学力の向上を目指した。
- ⑬ 生徒に「To Do リストの活用」やPDCAサイクルに基づいた進路実現に向けた学習を実践した。引き続き、自らの個別最適な学びで進路実現を果たす確かな学習習慣を身に付けさせたい。

(4) 進路指導の成果と課題

- ① 「30歳の時になりたい自分」を考えることを進路指導の重点とした。
- ② 「30歳の時になりたい自分」についての自問自答を継続的に記録に残させることで、自ら興味のあることを調べさせ、必要なことについて「To Do リスト」を作成させて実践を推奨した。実践できない生徒へのアプローチが課題である。
- ③ 自らの進路実現に向け、キャリア・パスポートの記入を通じてPDCAサイクルに基づく自己実現ができるような指導についても実践できない生徒への指導が課題である。
- ④ 特に進学に向けての取りかかりが遅いので、模擬テストの結果分析に基づく個別相談や個別学習指導について、1学年、2学年の各学期の個別面談で指導して効果があった。
- ⑤ 3学年の推薦入試や総合型選抜の面接練習に若手教員も立ち合わせ、面接指導を組織的に実施した。一般入試に向けた各教科の個に応じた指導も生徒に計画表を出させるなどして実現性の高いものにする。
- ⑥ 大学入試、公務員・就職試験合格に向けた講習を組織的・積極的に行うとともに外部模試を有効的に活用し、第一志望を諦めない生徒の育成を継続する。
- ⑦ 勉強合宿（夏季・冬季）はコロナ禍で感染拡大防止のため、校内勉強会を実施した。参加した生徒には、一般受験に向けて自学自習の学習習慣の定着と互いに自らの進路実現をするという進路実現意欲の向上を図ることができた。

(5) 生活指導の成果と課題

- ① 生徒の自律心や自己管理能力を育成する指導を全校体制で実践した。生徒の自律心を醸成することを念頭に置いたうえで、生徒部を中心とし、各学年との連携を深め、全教員で全生徒を指導することを目指したが、指導すべきことの確認が不十分なので、生徒指導部中心に定期的に拡大生徒部会を開催して全校指導ができるようにする。
- ② 生徒自らの自律を促すために、生徒自らがTPOを考え実践する「ドレスコード」指導をした。まだ、生徒がTPOを考え、自らの服装を整えその場にふさわしい服装で自らを律することができる段階に至っていない。ドレスコード最上級の日や進路指導場面で確実に生徒自らがTPOを考え実践する「ドレスコード」指導を継続する。
- ③ 時間厳守の徹底、遅刻防止・授業規律（チャイムスタート）の徹底、けじめのある生活習慣の徹底を図る。[あいさつをする]「時間を守る」「身だしなみを整える」「掃除をする」といった「あ、じ、み、そ運動」を推奨した。継続指導する。
- ④ スマートフォンや携帯電話の適正利用、特にSNSやいわゆる「ライン」に係るトラブル未然防止・(発生時の)早期対応などについて適時適切に指導した。組織的・全校的・継続的な取組を継続する。
- ⑤ 教員による交差点など危険箇所での立ち番指導、駐輪指導を実施した。また、生徒会生徒による自転車登校マナー向上キャンペーンを年3回実施して、一定の効果があつた。生徒に交通ルール、マナーを遵守させて、自転車事故根絶を図る。
- ⑥ いじめ対策委員会の定期開催、生徒のいじめアンケート調査、全教職員による日常の観察や面接等において、いじめの未然防止と早期発見・早期対応及び情報共有に努めた。適切な組織的対応を継続する。
- ⑦ 生徒の居場所を作り、悩みを抱え込ませないように、スクールカウンセラー等を活用し、生徒1人1人の心の健康に対応できる相談体制の充実により、個に応じた対応ができています。これを継続する。

(6) 特別活動・部活動の成果と課題

- ① 学校行事、委員会活動等に積極的に取り組ませ、生徒会及び各委員がそれぞれリーダーシップを発揮し、活力ある学校づくりに生徒部や担任がを支援した。
- ② 体育祭「一体感」、文化祭「おもてなし」、合唱祭「ハーモニー」という伝統のテーマに基づき、自主自律の精神で、生徒の主体的な活動を指導・支援した。コロナ禍で感染防止を徹底させ、三人行事を無事に実施できた。
- ③ 1年生に対する「部活動ひっぱり会」を充実させ、3年間部活動を継続させる指導を行う。年度の途中入部の促進、勧誘等により、部活動加入者の増加を図り、一定の成果を得た。
- ④ 小岩高校部活動方針に基づき、感染症防止対策を徹底させながら、それぞれの部活動の目標達成に向けて顧問や部活動指導員が意図的・計画的な指導をして、部活動に参加した生徒には部活動での充実感をもたせることができた。
- ⑤ 中学生の部活動体験や合同練習などにより、小岩高校の部活動を発信により、募集対策において大きな成果を得た。
- ⑥ 「Sport-Science Promotion Club」の指定により、生徒同士が切磋琢磨し技術や体力の向上に努める環境の向上が見られた。引き続き、合同合宿や強化合宿、他県遠征を通じて、より高い目標を目指すよう指導する。

- ⑦ 教科「人間と社会」を活用し、探究の学び方や社会人として生きる意識・力を身に付けさせるために必要なことについて考える学びができた。今後は地域における体験学習などを通して、異年齢や多様な人々と交流を深めさせたい。
- ⑧ オリンピック・パラリンピック教育や希望者に対するTGG訪問、留学生との交流などを実施した。国際交流の大切さ、将来の国際社会への関心を高めることができた。継続する。

(7) 心身の健康づくりと安全教育

- ① 薬物乱用防止教室、防災教育など生徒の生命、安全を守るための指導を実施した。生徒に自らの健康や安全を守る意識をもたせることができた。
- ② 体力テストの実施、体育健康教育推進校として、デジタル技術を活用した個別最適学びを考えた体育授業、学校行事、部活動を通じて、運動技術、体力の向上、精神面の強化を図り、どの取組においても生徒に意欲的に取り組ませることができた。
- ③ 学校保健委員会、安全衛生委員会を中心に、教職員、保護者、地域、関係機関との連携をして、生徒及び教職員の健康づくりを推進した。
- ④ 感染症、アレルギー反応への対応等に対する具体的な対応を確認、研修して、発生を未然に防ぐ予防指導、感染拡大を防ぐ取り組みを継続した。
- ⑤ 清掃強化日をもうけ、施設の清掃活動の徹底、ゴミの分別・減量に努め、校内の美化・環境整備を維持ができています。これを継続する。

(8) 募集・広報活動

- ① 都立学校開放事業に基づき、校内施設の開放や公開講座を実施した。小学生対象のハンドボール教室や中学生対象のバドミントン教室などの実施により、地域との連携を深め、地域貢献ができ、募集対策にも好影響を与えた。
- ② ホームページの更新、アクセス回数を増やした。在校生、中学生及びその保護者、また地域の方からも高評価を得た。これを継続する。
- ③ 中学校との連携を図り、授業公開、出前授業、学校見学・説明会、部活動見学を充実させたことにより、募集対策に成功した。

2 重点目標と方策による成果

(1) 生徒の個に応じた目標実現を目指す。

- ① 生徒の進路第一志望を諦めさせない学習指導、面接指導を徹底する。
 - ・ 進路決定率 100% ➡ 96.5% (進学準備を除く)
 - ・ 国公立大学、難関私立大学の合格者数 3名 ➡ 1名
 - ・ G M A R C Hレベルの大学 7名 ➡ 1名
 - ・ 日東駒専レベルの大学 50名 ➡ 66名
 - ・ 専門学校・公務員・就職内定率 100% ➡ 100%
- (自己評価)

3年生の第一志望の進路実現のために、個に応じた進路指導の実践を継続した。生徒が希望した面接指導や個別学習指導には、組織的に対応できており、個別指導を望んできた生徒の進路実現率は高い。さらに、生徒の大学進学への期待に応えるには、生徒の取組開始時期を2年の3学期からどのように早く取り組ませるかと生徒自ら、個別指導を求める生徒を増やしていくことが課題である。

(2) デジタル技術を活用した教育を推進する。

- ・ オンライン、一人1台端末を活用した研究授業の実施 年間5回以上 ➡ 8回
- ・ 定期考査採点分析システムを活用した教科会の実施 年間3回以上 ➡ 3回
(自己評価)

校務分掌にデジタル部を置き、デジタル技術を活用した教育の推進を図った。教員の間で、デジタル技術の活用に対しての意欲と能力に差があった。しかし、若手教員の研究授業を中心に一人1台端末を活用した授業やFormsを活用した授業参観が他の教員に好影響を与え、授業の最後にFormsを活用した振り返りの実践が増えるなど好影響があった。定期考査採点分析システムを活用した教科会の実施は英語科が実施した。次年度は他教科でも実施する。

(3) 部活動・学校行事の活性化を継続する。

- ・ 部活動加入率 85% ➡ 83%
- ・ 学校評価アンケート学校行事項目の生徒満足度 90%以上 ➡ 91%
- ・ 全国高校総体出場 1部 ➡ 0部
- ・ 関東大会出場 2部 ➡ 0部
- ・ 東京都ベスト32以上 8部 ➡ 6部

(自己評価)

新型コロナウイルス感染症の拡大の影響で、部活動・学校行事については様々な制限が生じた。特に3年生の修学旅行が中止になった影響で生徒の満足度は、3年生の満足度82%と低い回答となった。しかし、感染防止策を施しながら、生徒の活動欲求に応えるように様々な工夫をしながら、体育祭や文化祭、部活動を実施してきたことが、1・2年生の生徒の満足度の向上になったと考える。部活動と学校行事の活性化は生徒が望むことでもあり、本校の学校経営の重点項目として取り組んでいきたい。

(4) 生徒・保護者・中学生・都民から信頼され、安心・安全な学校を目指す。

- ・ いじめゼロ 0件 ➡ 0件
- ・ 自転車等交通事故ゼロ 0件 ➡ 4件
- ・ 遅刻者数の減少 1日平均25名 ➡ 平均37名
(令和3年度19名、令和2年度11名)
- ・ セーフティ教室、薬物乱用防止教室、交通安全教室の実施、教育相談委員会毎月開催毎学期の担任による個人面談・三者面談の実施 ➡ 全て予定通り実施

(自己評価)

いじめゼロは、今後も継続して安心・安全で生徒の居場所のある学校運営を継続して、未然防止、互いを尊重する教育を継続する。自転車交通事故ゼロについては、生徒会生徒による登校時自転車マナー向上キャンペーンで登校マナーが良くなる効果があったことから、自転車交安全と交通マナー向上の指導を継続する。

(5) 特別支援教育の理解推進と充実を図る。

- ・ 鹿本学園との生徒会役員を中心とした交流会の実施 ➡ 対面交流を実施
- ・ 「～特別支援教育の理解推進を目指して～広がれ絆！オープンフェスタ」への参加 ➡ 参加
- ・ 個別の支援が必要な生徒に対して教育相談委員会による個別支援計画の作成 ➡ 実践

(自己評価)

鹿本学園と生徒会を中心とした交流は対面交流を実施できた。ポッチャの対決や吹奏楽部の演奏披露を実施して、その様子を生徒会役員がパワーポイントで全生徒に伝えたり、ホームページで発信したりして、特別支援教育理解推進ができた。個

別の支援が必要な生徒に対して教育相談委員会による個別支援計画の作成については、支援すべきことを整理して、生徒、保護者、必要に応じて関係機関と情報の共有をして個に応じた対応ができています。

(6) 国際理解教育の推進を目指す。

- ・ オンラインおよびメールを活用した海外交流を年間3回実施
 ➡オンライン交流3回、ビデオレター交流2回、対面交流1回実施
- ・ JET青年による英会話活動を毎月(10回以上)実施
 ➡希望生徒と交換日記を実施
- ・ 希望生徒に対するTGG校外学習を年間2回実施
 ➡2回実施
- ・ オリンピック・パラリンピック教育の一環として、講演会、体験活動を実施
 ➡オリンピック・パラリンピック教育講演会実施

(自己評価)

コロナ禍であったが、アメリカのユニハイ高校とのビデオレター交流2回、オンライン交流を1回実施した。また、フランスのジョンエカー高校とのオンライン交流を2回実施して、2月には、ジョンエカーが来日して、本校生徒と直接交流するなど充実した国際交流ができた。また、希望する生徒を引率してTGG校外学習を年間2回実施した。さらに、ソチオリンピックのボブスレーに出場したオリンピックを招いたオリンピック・パラリンピック教育講演会を実施した。すべての取り組みにおいて、参加した生徒の振り返りシートには、新たな気づきや海外に目を向けることの重要性に関する記述があり、取り組みの成果があった。すべて本校ホームページ公開済である。

(7) 広報活動・募集対策活動の更なる充実を目指す。

- ・ 授業公開・学校見学会・学校説明会等の来場者数 2,500名以上 ➡3918名
- ・ 部活動見学 500名以上 ➡412名
- ・ 地域ボランティア・体験活動参加 3回 ➡3回

(自己評価)

コロナ禍で実施可能な広報活動・募集対策活動を実践した。密を避けるために、学校見学や学校説明会に定員を設けなければならない、その定員も募集開始、数分で定員オーバーとなり、苦情の電話を多数頂くこととなった。実施回数を増やすなどして、要望に応える工夫をしたが来年度は募集方法等の工夫をしたい。また、部活動体験や見学は受検に直結する結果が見られるので、感染防止策の徹底をしながら、この活動の充実をしたい。地域ボランティアとしては、鹿本学園との交流や自転車マナー向上キャンペーンの活動を4回実施した。来年度は防災関連の体験活動を検討したい。

(8) 教職員のライフ・ワーク・バランスの積極的な取り組みを目指す。

- ・ 報告・連絡を効率よく行い、会議・委員会の時間を短縮する。(50分以内)
- ・ 原則として、部活動の休養日を1週間に1日以上、必ず設ける。(生徒の怪我や事故防止の観点から練習時間も工夫する。)
- ・ 毎学期、定期考査期間を定時退庁ウィークとし、長時間労働の改善を図る。7、8、12、1月を休暇取得促進月間とし、休暇取得の促進を図る。
- ・ 若手教員を対象とした校内研修会を、年間を通して計画的に実践する。(年間10回)

(自己評価)

会議・委員会の効率化を図り、会議時間を50分以内実践を目指した。さらに会議のスリム化を目指す。また、新型コロナウイルス感染症対策のためにも、原則と

して、部活動の休養日の制限があったため、それを実践した。感染症対策のためにも、自宅勤務が導入されたこともあり、長時間労働の改善されてきている。これを継続していく。若手教員を対象に研究授業の研究協議、オンライン授業、人権教育、生活指導、進路指導に関するグループワーク等を年間10回実践した。特にオンライン授業や一人1台端末導入に向けた校内研修は学校全体に好影響を与えたので、今後も若手を中心とした校内研修を学校全体の校内研修と連携させる取組をしていく。

3 学校運営連絡協議会による学校評価（学校評価報告）

(1) 学校評価の観点

「学校生活への満足度」「学習指導」「生活指導」「進路指導」の観点で実施する。

(2) アンケート調査の実施時期・対象・規模

・ 令和4年12月	全校生徒	915人
・ 令和4年12月	保護者	492人
・ 令和4年12月	近隣地域住民	88人
・ 令和4年12月	教職員	56人

(3) 主な評価項目

学習指導、進路指導、キャリア教育、生活指導、家庭・地域との連携、いじめ防止

(4) 評価結果の概要（学校及び校長への意見・提言内容）

- ・ 生徒は小岩高校に入学してよかったと思っている。（ ）は昨年度。
生徒 91% (92%) 保護者 92% (94%) 教職員 95% (98%)
- ・ 小岩高校の生徒は生き生きと学校生活を送っている。
生徒 94% (96%) 保護者 93% (91%) 教職員 96% (100%)
- ・ 学校は落ち着いて授業に集中する雰囲気である。
生徒 68% (82%) 保護者 84% (83%) 教職員 88% (89%)
- ・ 授業は進路希望実現に必要な学力を身に付けるのに十分な内容である。
生徒 82% (78%) 教職員 75% (75%)
- ・ 補習、講習は進路実現のために十分な量と内容である。
生徒 80% (74%) 教職員 77% (72%)
- ・ 学校は担任や進路部の先生からの情報提供が豊富で、生徒の相談にもよく応じている。
生徒 90% (88%) 保護者 76% (75%) 教職員 91% (88%)
- ・ 生徒一人一人の個性や適性に対応した進路指導を行っている。
生徒 85% (73%) 保護者 74% (74%) 教職員 93% (88%)
- ・ 学校は進路の実現のために、生徒が主体的に高い意欲をもてるような指導を行っている。
生徒 78% (71%) 保護者 76% (61%) 教職員 77% (75%)
- ・ 学校は生徒が学校生活に集中し、落ち着いた学校生活を送るために十分な指導を行っている。
生徒 87% (86%) 保護者 84% (84%) 教職員 79% (88%)
- ・ 生徒の服装や身だしなみに関する指導は十分である。
生徒 87% (83%) 保護者 84% (71%) 教職員 52% (54%)
- ・ 学校は社会の一員としての態度を身に付けるための指導を十分行っている。
生徒 86% (79%) 保護者 81% (80%) 教職員 75% (70%)
- ・ 学校は遅刻指導をはじめ、規則正しい生活習慣に関する指導を十分行っている。
生徒 92% (94%) 保護者 90% (88%) 教職員 86% (81%)
- ・ 学校は、いじめ防止に積極的に取り組んでいる。
生徒 87% (86%) 保護者 87% (81%) 教職員 100% (98%)

- ・ 生徒は体育祭や文化祭、また合唱祭や球技大会などの行事を主体的に取り組んでいる。
生徒 94% (92%) 保護者 93% (89%) 教職員 91% (88%)
- ・ 小岩高校では部活動が充実している。
生徒 97% (97%) 保護者 93% (92%) 教職員 100% (100%)
- * 生徒の評価は、3学年ともほぼ変わらず、高評価になっている。前年度評価の低かった学年も今年度は他学年と同様であり、今年度は学年による格差がなくなった。
総じて保護者や地域の評価は例年並みに高く、学校の運営等に関して概ね好意的に捉えられていることがわかる。
本校職員の評価が、昨年厳しい内容になっていたが、今年度はどの項目も高い評価になっており、コロナ禍の中で、様々な工夫を行った様子が感じられる。

(5) 評価結果の分析・考察（学校及び校長への意見・提言）

- ・ 学習指導において「落ち着いて授業に集中する雰囲気である」項目については、昨年度並みに生徒の評価が高かった。この評価結果から、コロナ禍であっても生徒は普段通りに学習を行う環境が保たれていることが分かる。引き続き授業規律を守り、学校全体で意識を徹底し、学習環境を整え、落ち着いた環境の中授業に集中することで、学習の基礎が確立すると思われる。今以上に教員も生徒も一つ一つの授業を大切にす姿勢を心掛けることを継続していく。その姿勢を土台として、大学等進路希望実現のための授業内容のさらなる充実に繋げていきたい。また今年度も全学年による朝学習の実施、朝及び放課後の補習・補講の実施を行った。しかし勉強合宿はコロナ禍のため、行うことができなかった。来年は実施できることを期待している。自習室への参加生徒も一定数出てきていることから、これらの内容をさらに進化・発展させることが求められるところとなっている。
- ・ コロナ禍に対応した学校行事を行うことができ、体育祭や、文化祭、合唱祭を実施できたことは生徒にとっても大変充実感を味わうものとなった。またこれらの行事や部活動は生徒が主体的に企画・運営し、積極的に参加していると感じている。行事・部活動と学習の両立について、教員の生徒への励ましや声かけ等、どちらかに偏ることなく、バランス感覚を大切にしながら、行事や部活動の一層の充実・活性化と学力の向上を今後も維持し、さらなる高みを目指していく必要がある。

4 次年度以降の課題と対応策

(1) 学校運営

「スクール・ミッション」の「知力」「体力」「人間力」を高めることを教育目標とし、学習活動と学校行事・部活動との両立を図り、生徒の進路実現に向けた全ての教育活動を通して、「30歳の時になりたい自分」を考えさせて、自ら学ぶ力、課題解決能力、コミュニケーション能力、基礎体力、自律する力、協働する力、行動する力をそなえるように指導して、揺るがぬ力を基盤に未来社会に輝く生徒を育成するために、以下のことを指導の重点として教員の共通理解を図る。

- ① 各教員の個性や特性を発揮させ、授業、特別活動、部活動で様々な工夫をさせ、まず教員自らが「小岩高校に来て良かった」と体感できる教育場面を創出することで、生徒が「小岩高校に来て良かった」を体感できる教育を継続する。
- ② 「小岩高校に来て良かった」という体感から、自己肯定感に繋げるようにして、小岩高校の一員として自覚、よりよく生きることを考える「小岩プライド」を育て

る教育を継続する。

- ③ 「安心・安全で生徒の居場所のある学校づくりを推進する。新型コロナウイルス感染症の感染防止対策を生徒自らが意識して実践できるよう指導し、いじめゼロ、生徒が自分で安心できる居場所（先生や友達）を見つけさせ、様々な悩みなどを相談できる校内体制を整える。
- ④ 「30歳の時になりたい自分」を考えさせることをキャリア教育の柱としてキャリア・パスポートを活用させながら、「各教科」「人間と社会」「総合的な探究の時間」「ホームルーム活動」「特別活動」等での調べ学習や自問自答等を記録させることで、自らの進路実現に結びつけることができるように指導する。
- ⑤ 「各教科」「部活動」「特別活動」の場面において、7つのスクールポリシー（自ら学ぶ力、課題解決能力、コミュニケーション能力、基礎体力、自律する力、協働する力、行動する力）について、適切に指導するようにして、揺るがぬ力を基盤に未来社会に輝く生徒を育成する。

（2）組織運営

- ① 企画調整会議を中心としたPDCAサイクルの構築を意識した分掌運営の継続企画調整会議の内容の確実な報告と各分掌からの意見を反映した学校運営をする。各分掌主任にC（前年度の反省の確認）→A（課題改善策の検討）→P（改善策の立案）→D（記録を残す実践）のPDCAサイクルを意識した分掌運営を継続させる。
- ② 服務事故ゼロを目指す。
年度当初、強化月間（2回）のみならず、様々な規模・方法で、研修を行う。
また教職員相互の意識を高め、声かけなど注意喚起を常時行う点検体制を整備・強化する。

（3）学習指導

- ① 「授業の最後にできてほしい具体の姿」について、生徒にわかりやすく説明して、それが、「評価の観点」となることを視覚的に示すようにする。
- ② 授業において、「生徒主体の学び」と「深い学び」を引き出す授業実践をして、生徒の頭の中が働いている状態を作り、自分の考えを言ったり、書いたりさせるようにする。
- ③ 「前時の復習テスト」「基礎的な小テスト」「繰り返し学習場面の設定」「反復学習プリント」等の基礎的、基本的な学習の定着を促す指導を実践して、生徒に確かな学力を身に付けさせる。
- ④ デジタル技術を活用して、生徒に興味・関心をもたせ、自ら調べたり、仮説を立てたり、試行錯誤をさせる場面を作ることで生徒に学びに向かう力を育成させる。
- ⑤ 授業の最後に5分以上の時間を確保して、授業のゴールを確認する問題演習や授業でわかったことを自分の言葉でまとめさせる指導する。
- ⑥ 「授業でできなかったこと」や「生徒自らの課題」について、自宅学習での3回復習を推奨して、確実な学力を身に付けさせる。

（4）進路指導

- ① 「30歳の時になりたい自分」を考えることを進路指導の重点とする。
- ② 「30歳の時になりたい自分」についての自問自答を継続的に記録に残すことで、自ら興味のあることを調べさせ、そのために必要なことについて「T o D oリスト」を作成させて実践させる指導をする。
- ③ 自らの進路実現に向け、キャリア・パスポートの記入を通じてPDCAサイクルに基づく自己実現ができるように指導していく。
- ④ 特に進学に向けての取りかかりが遅いので、模擬テストの結果分析に基づく個別

相談や個別学習指導について、1学年、2学年の各学期の個別面談で指導するようにする。さらに個人面談の進路希望を生徒環境調査票の裏面に記入して3年間を見通した個に応じた進路指導をする。

- ⑤ 3学年の推薦入試や総合型選抜の面接練習に若手教員も立ち合わせ、組織的に面接指導を組織的に実施するとともに、一般入試に向けた各教科の個に応じた指導も生徒に計画表を出させるなどして実現性の高いものにしていく。

(5) 生活指導

- ① 生徒の自律心や自己管理能力を育成する指導を全校体制で実践する。

生徒の自律心を醸成することを念頭に置いたうえで、生徒部を中心とし、各学年との連携を深め、全教員で全生徒を指導することをモットーとして教員による声かけを徹底して行う。上記の実践のため、適宜、拡大生徒部会を開催して生徒に指導すべことを職員会議で確認して、全教員で指導する。生徒自らの自律を促すために、生徒自らがTPOを考え実践する「ドレスコード」指導をする。儀式的行事において、生徒がTPOを考え、自らの服装を整えその場にふさわしい服装で自らを律することができるように指導をする。また、時間厳守の徹底、遅刻防止・授業規律（チャイムスタート）の徹底、けじめのある生活習慣の徹底を図る。さらに、スマートフォンや携帯電話の適正利用、特にSNSやいわゆる「ライン」に係るトラブル未然防止・（発生時の）早期対応などについて組織的・全校的・継続的な取組を推進する。

- ② 保護者との協力体制を確立する。

様々な状況にある生徒の対応について、保護者との連携を密にし、情報を交換・共有することに加え、三者面談、家庭訪問等を行い、学校の方針理解、家庭生活における保護者の役割意識の深化等を図る。保護者会等、保護者同士の情報交換・連帯意識深化等の機会を保障する。

(6) 特別活動・部活動

- ① 感染防止対策を徹底させ、三人行事のコロナ禍前の完全復活と再生を目指す。

生徒主体の自律的な運営を強化するとともに、それぞれのテーマ（体育祭＝一体感、文化祭＝おもてなし、合唱祭＝ハーモニー）の認識を深めさせる。早め早めに実行委員会・生徒会を活性化させ、主体的・自律的な運営を促し、満足感・充実感を高めさせる。

- ② 部活動加入率の一層の向上を図り、更なる活性化を図る。

感染防止対策を徹底させて生徒の部活動に対する志気を高める体制を学校全体で継続する。勉強や学校行事等との両立や、自主性・自律性を高める意識・方法・工夫等を顧問間で共有し、全校的な活性化へ連動させる。そして顧問教諭と部員間の信頼関係、部員同士の信頼関係の構築を図るための工夫を、部会や顧問会議等を通じて図る。

(7) 広報・募集対策活動の充実

- ① ホームページの一層の充実を図り、更新の頻度アップ・内容工夫、生徒の活動状況、保護者・地域の方々を含めた都民への情報発信に努める。

- ② 充実した教育内容・施設設備などを直接的・間接的に伝える機会である学校公開・説明会・見学会・部活動体験等を一層充実させる。

(8) 国際理解教育の一層の推進

- ① 「国際理解」を目標とした、授業（「総合的な探究の時間」・「人間と社会」を含む）・特別活動・部活動（希望者によるTGG訪問）などを意図的・計画的に行う。

- ② 修学旅行や校内における「留学生との交流」を充実させるべく、国際理解教育委

員会と当該学年が連携し、生徒の意識を高める。

- ③ 「英語教育推進校」としての授業・事業を充実させ、英語の各技能（英検等合格者数増）を高め、実践の場面を活用し、国際理解を推進する。